

入 選

大好きないちごちゃん

四年 鈴木羽音

私が幼稚園の年長になったころ、ハムスターをかいはじめました。名前は「いちごちゃん」です。いちごちゃんはいつもかわいくて、えさをあげると口いっぱい大好物のひまわりのたねをつめます。ほっぺたがえさでばんばんになった顔のいちごちゃんもかわいいのです。

はじめは、かまれたりしないか手のひらにのせることがこわかったです。でも、だんだん慣れてくると、大人しく手のひらにのつてくれたり、きげんがわるいといやがつてにげようとするときもありました。

いちごちゃんがいちばん落ち着く場所は、ふかふかのわたがつまっている家でした。このわたしは、ハムスターのおふとんになります。私が朝起きたとき、いちごちゃんは家の出口のところから顔だけ出してすやすやねています。ね顔もたまらなくかわいい、いちごちゃんです。

いちごちゃんのさんぽは、いつも家のろう下でした。びっくりするくらい速く走るので目はなせません。いちごちゃんは、毎日家族みんなに見守られていて、家族のいやしで、顔を見ると安心します。私が二年生になった五月のある朝、いちごちゃんは死んでしまいました。その前の日、私が学校から

帰るといちごちゃんの様子がへんでした。よく見ると、かたほうの目が開いていませんでした。きげんもわるく、家にこもったままでした。家族も私もとても心配でした。そのまま朝になって、ママが何度もいちごちゃんをよびましたが家から出てきません。出てこないのはいちごちゃんのおふとんの中をのぞくと、いちごちゃんはかたくてつめたい体になっていました。私はなみだがとまりませんでした。家族のみんなもないていました。かなしくて、かなしくて、学校へ行っている間もいちごちゃんのことをたくさん思い出しました。

そして、いちごちゃんは火そうされてほねになりました。小さなこつぽに入ったいちごちゃんを見てまたかなしくなりました。大好きないちごちゃんはもういないけれど、いちごちゃんの写真を見たり思い出したりします。いちごちゃんは、ずっと私たち家族のたからものです。